外に出ながら老人介護。

人生八十年いろはがるた

樋口恵子

文化出版局

外に出ながら老人介護。

人生八十年いろはがるた

樋口恵子

文化出版局

外に出ながら老人介護。●人生八十年いろはがるた

一九九二年六月二十一日　第一刷発行

著　者――樋口恵子
発行者――大沼　淳
発行所――文化出版局
〒151／東京都渋谷区代々木三―二二―一
電話／〇三（三二九九）二四八一（編集）
〇三（三二九九）二五四二～八（販売）
振替／東京二―一九五六七〇番
印刷所――図書印刷株式会社
製本所――株式会社明泉堂

©Keiko Higuchi 1992 Printed in Japan

外に出ながら老人介護。●人生八十年いろはがるた◉目　次

そ 外に出ながら老人介護……6

つ 妻を看(み)とらば男の意気地……19

ね 寝たきりつくるは寝かせきり……32

な なくては死ねない良い医療……45

ら 来世へ逝くなら遺言書いて……57

む 無理なく言えるか「ありがとう」……70

う 家(うち)でも開こう花婿学校……83

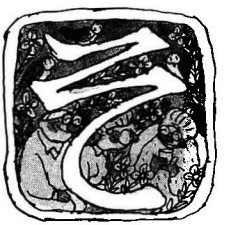
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

の 望むな〝かわいい〟おばあさん……96
お 老いても一人称で……108
く 苦労は口に出せ……121
や 病み上手の死に上手……134
ま 待てど暮らせど来ぬ……家族……146
け 権利は老いても古びない……159
ふ 不倫は老いて正々堂々……172
あとがき……185

装幀・イラストレーション　小田桐　昭

外に出ながら老人介護。／人生八十年いろはがるた

そ　外に出ながら老人介護



長いあいだこんな仕事をしていると、私のような者でも時たま「物書き冥利に尽きる」という経験をすることがある。三年ほど前ある県の行事へ出かけ、責任者である女性管理職と話し合ったときのことだ。その管理職は当時の私よりほんのちょっと年上で五十代半ば。

「国連婦人の十年」（一九七六～八五）の中で各自治体に設置された婦人問題担当窓口の長として、その県初の女性管理職となった。実はこういう人はここ十年、意外なほど多く生まれている。

東京都などいくつかの例を除くと、「国連婦人の十年」以前は、女性管理職は女医さんが就任する保健所長以外はゼロ、というところが珍しくなかった。婦人行政の責任者もまた男性、というところもたくさんあるが、まあこれを機会に女性の登用を、というムードが生まれたのは事実である。役所の中に実績ある女性が見当たらない場合は、女性の職場として伝統ある教職から教頭クラスの先生を横すべりさせたり、いろいろ工夫したようだ。女性管理職は、この十年の間に二倍以上の伸びを示している。「朝日新聞」の連載マンガ「フジ三太郎」の職場でも課長の男性をはさんで部長と係長が女性、以前放送したＮＨＫテレビ小説「青春家族」の母親役もデパートの課長さんだ。アメリカの全管理職中三分の一が女性、というのにはまだまだ遠く及ばないが「大きい机と椅子に座る」女性の増加は、職場の男女の風景を確実に変えつつある。

県庁初の女性管理職、というのは、地方ではニュースにも大きく取り上げられるし、注目の的ということは、本人にとって緊張の連続だった。幸い三人の子どもはみんな独立したし、中学の校長先生をしている夫との共働き歴三十年の実績は、今さらちょ

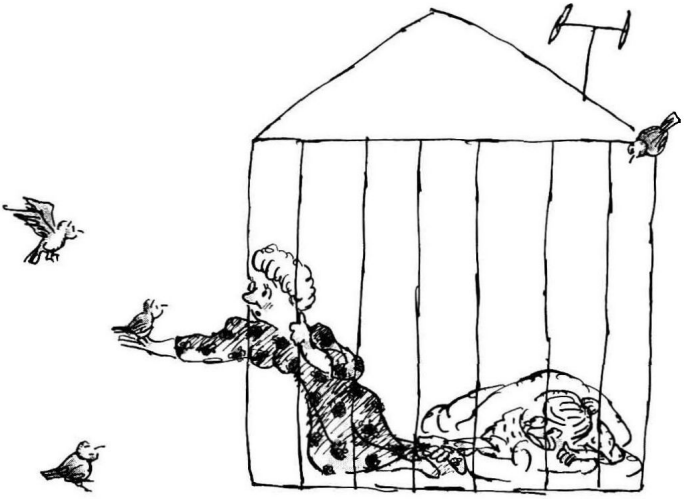
っとぐらい帰宅が遅れる日が続こうと小ゆるぎもしない――はずだった。ところが、突然八十歳になる姑が倒れた。それまでは、嫁が全部支度していけば、夕食は温め直して六十近い息子に食べさせてくれる行き届いた姑だった。

病気は中程度の脳卒中で、後遺症が残った。寝たきりではないが、トイレは付添いが必要だし、食事は上げ膳据え膳でないとダメ。夫の校長先生と近所に住む義妹たちは、当然のように「しかたがない。仕事をやめて面倒を見てもらいたい」と言った。

「もし私が、樋口さんたちの本を読んでいなかったら、まわりの人の希望に従って退職していたと思います」

とその管理職は言った。「樋口さんたちの本」というのは、『女・老いをゆたかに』（ミネルヴァ書房）という本で、高齢化社会をよくする女性の会の第二回シンポジウム記録集である。この中で私たちは、なぜ女性が、とくに嫁が老人介護のために職を辞してまで責任を負わなければならないのか、男性を含めて家族と社会が介護責任を分かち合い、仕事と老人介護が両立してあたりまえになるように、と力説している。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com



「この本のおかげで、私は夫や小姑の要請にノーと言う勇気を持つことができました。私は県下初めての仕事に意欲を燃やしている。女性の地位向上のポストに世間の注目もある。私はやめたくない、とはっきり言いました。その代りお姑さんは意識のある限り家でみる、と言いました。一人でおいておけない、というだけで、そんなに手がかかるわけではないのです。シルバー人材センターから中高年の女性を二人コンビで派遣してもらうことにしました。食事の支度は全部私がやっていけば、あとはお守りをしてもらえばいいのですから」

最初、小姑たちからは「きつい嫁」だと陰口を言われた。夫もあんまり機嫌がよくなかった。しかし妻が新しい仕事に取り組みながら懸命に姑の介護に励む姿を見て、まず夫の校長先生が変わった。三人の子育て中でさえ一度も台所へ入ったり家事を手伝おうとしなかった夫が、米をとぎ、電気釜を仕掛け、洗濯機を回しておくようになった。時には洗濯物が干してあるようになった。もっとも、シーツなどは畳んで叩かずに干すので、あとでかえってアイロンに苦労することはあったけれども。

「男の人って、あれだけ母親に弱いんだ、ということがよくわかりました。母親が倒れてあまりものが言えなくなったので、六十近くなって初めて自分の思いどおりに行動できるようになったのです。姑は、男は台所に入るもんじゃない、という人でしたから」

小姑たちも、兄が率先して兄嫁を助けるので少しずつ態度が変わり、近ごろでは手を貸してくれることも多くなった。どうやら彼女の仕事は、定年まで勤めて次の人にバトンタッチできそうな形勢だ。それもこれも、「あの本」で「舅姑が倒れたとき嫁

が職を辞さなくても悪くはない」という見方、考え方を知っていたからだ。いくら心の中で働き続けたい、と願っても、自分自身「それは悪いことだ」という思いにとらわれていると、解決へ向けての次の工夫が浮かんでこない。本で得た知識と情報で「これでいいのだ」という自信があったからこそ——と言われて、私は女たちが情報を送り合うことの意味をあらためて確認した。彼女は私たちの本で勇気づけられたと言うが、私もまたこの女性管理職のことばでどんなに勇気づけられたかわからない。

今でもいわゆる「寝たきり老人」（六か月以上寝たきりと認定された者）だけで二十数万人が自宅で介護を受けている。さらに「痴呆性老人」と呼ばれる人が重複を含めてだが同じくらいいると言われる。それと同じ数の「主たる介護者」が一家に一人ずついて、その八～九割が女性であることはよく知られている。その続柄の中で今のところいちばん多いのは「嫁」で次いで妻そして娘。「嫁」や「娘」の中には、自分の仕事をやめて介護にあたる人も少なくない。

友人のひとりは、子育てで中断した仕事を再開すべく、四十代になって留学した。その海外留学中、姑が倒れて入院。姑が家にいなくなったので、舅の面倒を見るために嫁である人が留学先から急遽呼び返された。病人の姑の世話ならともかく、妻が入院したあとの舅の面倒を見るために呼び返されたというのだから、考えてみると変な話である。舅は高齢とはいえとても元気。しかし何ごとも妻を「オイ」と呼び立てなくては過ごせない人だった。やがて姑は亡くなり、彼女は決して「寝たきり」ではない舅の世話をするためにまた家庭に戻った。それからもう一度、舅とぶつかりながら外へ出る態勢をつくっていったが、再スタートは十年近く遅れてしまった。当時は主婦の再就職ブームと言われたが、それは家族に高齢者がいない気楽な身分の人だけの話で、この人のような場合、子育てにやっと一区切りついて外へ出ようとすると、そこにまた「老人のお世話」という壁が立ちふさがった。そして十年前は周囲の目がきびしくて、「嫁」にはなかなかその壁が越えられなかった。昭和五十七年、私たちが第一回女性による老人問題シンポジウムを開いたとき、そんな「嫁たち」の悲しいグ

チが一挙に噴出した感があった。

しかし、ここ三、四年、明らかに様子が変わってきた。在宅で老人介護しながらも、外に仕事を持ちつづける人が出てきた。このところいくつかのシンポジウムで、私は地方公務員や教員などの仕事をやめないで、寝たきり老人のお世話をしている女性に出会った。みんな、ある時間を人に頼んで見てもらっている。その分、自分だって働いて収入をあげているのだから、と割り切って払うべきものは払う。休日や夜は、夫や子どもなどに応分の協力をしてもらう。自分だけ「いい嫁」になろうとはしない。ある女教師は、毎週、夫と夜の当番の日程をつくり、ちゃんと宿泊の研修旅行も参加していた。そういう嫁たちが異口同音にいうことばがある。

「私は、仕事をしていたからこそ、何年も寝たきりの年寄りをウチで見ていられるのです」私はコレで老人介護ができました——と言うとしたら、切り札のコレは、今や仕事なのだ。仕事で自分自身の社会が持てる。そこで自分なりの力を発揮しながら人々と交わることができる。それで元気を回復し、また老人を看とる勇気が湧いてく

る、というのだ。

仕事というのは、この際必ずしも職業ではないこともある。ある地方都市の生活協同組合の大会に招かれたときのことだ。講演を終わって、生協の理事さんたちと会食したとき、いちばん年輩の女性はゴマ塩の髪に赤ちゃんをおぶっていた。共働きのお嫁さんを助けて、孫のお守りをしながらの社会活動である。「よくなさいますね」と声を掛けたら、周囲のお仲間が「この方はその上、寝たきりのお姑さんまでお世話していらっしゃるんですよ」と説明してくれた。

六十歳のこの理事さんに、八十代後半の姑がいてもう数年、寝たきりに近い生活だ。月に一度の理事会はじめ、週に一度くらい外出する仕事があるが、彼女は孫を背負ってどこへでも出かけていく。背中に孫、わが家に姑、ほんとに今どきの六十歳は上と下と両方の世代を支えるのだから大変だ。家を留守にするとき、彼女は近所隣に声を掛けて、姑と年齢の近いおばあさんたちを、姑の枕もとに呼び集める。

「そばで、話相手をしてやってみててくださいよ、助かるから——って頼むと、ご近

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com